

Title	<総説>伝典の木
Author(s)	満久, 崇麿
Citation	木材研究・資料 (1996), 32: 1-5
Issue Date	1996-12-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/51420
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

仏典の木*

満久 崇 麿**

Wood in Sutra*

Takamaro MAKU**

(平成8年8月31日受理)

日本で「木の文化」についての歴史的な記述は、8世紀の中頃に作られた「日本書紀」の神代(上)の頃で、須佐之男命が

マユゲを抜いて、クスノキを作り

アゴヒゲを抜いて、スギノキ

ムナゲを抜いて、ヒノキ

シリゲを抜いて、マキを作り

クスノキとスギで舟を作り、ヒノキで住居、マキでお棺を作れと教え、その種子をまかせたという話に始まるようだが、現実には縄文時代の島浜遺跡のスギの丸木舟、弥生時代には登呂、山木遺跡からのスギ、ヒノキなどの柱、榿類、湯納遺跡のモチノキ、シイノキ、ビワなどの住居用材にはじまっているようである。

ところで、本日話題の仏典は紀元前3百数十年頃から作られはじめ、そこにはいろいろの植物が教義の説明その他に引用されており、その数はおおよそ2, 3百、その内の約半数が樹木であろうと推察される。

日本訳の仏典にあらわれるこれらの樹木のうち、有名なのは仏教3霊樹といわれる

インドボダイジュ、サラノキ、アソカノキ

で、これにマンゴーとエンジュを加えて、仏教5木ということもある。

これらの樹木の名は古代インドのサンスクリット語(梵語)、時にはパーリ語(巴語)の音訳中国名であることが多い。

そういう訳で、本日は梵語にも少し触れながら話を進める。梵語というと、我々の日常生活に全く縁のない言葉と思われるが、また大体その通りだが、中には案外身近かなものもある。

例えば、お馴染のヒマラヤシーダ、ヒマラヤ山のヒマラヤは梵語であって

Hima : Snow, cold, winter

alaya : Permanence, restres 場所, 存在

* 木悠会発足式典(平成8年4月20日, 宇治)において講演

** 京都大学名誉教授(木質科学研究所元所長)

Key words: Buddhist Scriptures, Sanskrit, Sutra

という意味をもち、Himalaya は一般に abode of snow (雪の場所) をあらわし、中国語では「雪山」と訳されている。

さてこの辺で本題にはいって、仏典の木といえ、まず先述の3霊樹、インドボダイジュとサラノキとアソカノキであろう。

1. インドボダイジュ (梵 Bodhi-vrksa, 菩提樹, 思惟樹, *Ficus religiosa*)

クワ科イチジク属の常緑樹で、現地ではピッパラまたはアシュブアツタと呼ばれていたが、釈迦がブッダガヤに生えていたこの大木の下で、いわゆる結跏趺座して悟り (Bodhi, 菩提) を披いたことから菩提樹 (Bodhi-vrksa) と呼ばれ、日本ではシナノキ科のボダイジュと区別してインドボダイジュと呼んでいる。ところで悟り (覚) とは、一体どういう状態であろうか? この言葉は今や仏教を離れた日常語となっているが、本来は

「本能に基づく精神の動揺が全くない時にあらわれる眞実の知慧 (正智) が眞理と全く合致する状態」であるという。

釈迦はインドボダイジュの下で、この状態に達した訳である。

この木は6世紀末にベンガルの部族王シャシャンカによって切倒されたが、その約50年後に、中国の玄奘三蔵がここを訪れた時にはそのヒコバエが樹高約8丈 (約15m) に成長していたという。

このヒコバエは1876年の暴風雨で倒れ、現在はそのままヒコバエが成長しており、釈迦が結跏趺座していた「金剛座」と共に、インド屈指の観光地になっているようである。

イチジク属の木だから、イチジクそっくりの果実が太い幹にもできている。勿論熱帯樹だから、日本では冬は露地で育たない。

日本で通常ボダイジュと呼び、比叡山や眞如堂などに特別待遇されている木は、シナノキ科シナノキ属の落葉樹 (*Tilia miqueliana*) である。これは1168年明庵栄西が中国から間違えて持帰ったもので、釈迦の菩提とは関係のない木だが、日本ではこの木が「ボダイジュ」の座を占めている。歴史の中にはやみからやみへと消えるものが多い反面、これは間違った歴史というものは仲々改められず、消え去らない1つの例であろう。

ところで木研での話となれば、材質や利用についてもふれておく必要がある。この木は本来神聖樹としてあまり利用しないが、比重が低いので、箱物などを作ることもあるという。

2. サラノキ (梵 Sāla, 沙羅双樹, *Shorea robusta*)

紀元前486年入滅 (死) を予知した釈迦は、ヒマラヤ山麓クシナガラを流れるヒラニヤヴァティの河岸にはえていた1対のサラノキの間に死の床を用意させたので、日本では一般に沙羅双樹と呼んでいる。

サラノキはフタバガキ科サラノキ属の常緑高木で、お馴染みのラワンの1種である。

インドではチーク、ヒマラヤスギと並ぶ3大有用樹種の1つで、古くから各地に栽培され、仏教集団は当時各地のサラ林に滞在して、宗教活動を行っている。

梵語 Sāla は硬いという意味をもち、その名の通り材質が硬く、強く、耐久性がよいので建築、土木その他に、また樹皮は燃料、種子は食用という万能樹種である。

「サラ林をよく撫育すれば美林をうる如く、戒を守ればよい仏果を得るであろう」

などと戒律にも引用されている。

ボダイジュ同様、日本では冬は温室でないと過せない。日本の寺院の境内で霊樹、神聖樹サラノキとして植られているのは大抵葉が似ているツバキ科のナツツバキ (*Stewartia Pseudo-Comellia* Max) 類である。

3. アショカノキ (梵 *Aśoka*, 阿輸迦樹, *Saracca indica*)

マメ科アショカノキ属の落葉中木。この木はボダイジュやサラノキほど一般に知られていないが、釈迦の誕生と結婚に深い関係をもつ木である。

すなわち、釈迦の母マーヤ王妃が城内に咲きほこっているアショカノキの花に手をふれようとした時、釈迦（ゴータマ菩薩）が生れでて第一声を放ったという。この第一声は仏典によって違うが、一般によく知られているのが、御存知の長阿含経の「天上天下唯我独為尊」である。

また釈迦が成長して、結婚適齢期に達した時、多くのお嫁さんの候補者の中から、最後にアショカの花を与えた女性、アショーダラ姫を選んだと伝えられている。

梵語 *Aśoka* は無憂という意味なので、この木を一名無憂樹と呼ぶ、目出度い木で、花の美しさが特徴である。

4. マンゴー (梵 *Āmra*, 菴羅樹, 菴摩羅樹, *Mangifera indica*)

ウルシ科マンゴー属の常緑大木、仏教5木の1つである。花は沢山つくが不完全花（つまり花の構成要素の萼、雄蕊などの何かが欠けている花）が多いために、その割に実を結ぶのが少ないが、それでも枝もたわわに結実する。随分古くから育林されていたらしく、玄奘三蔵の西遊記にマンゴー林がよく出てくる。

「マンゴーの花は多いが、実を結ぶものが少ないように、衆生の菩提心を起すものは多いが、これを成就するものは少ない」（ジャータカ）。

「諸行無常ということを受得すれば、一切の煩惱を絶つことができる。恰もマンゴーの枝を暴風がゆり動かせば、その果ことごとく落ちるが如し」（雑阿含経）。

凡夫では仲々こうはいきません。

果実は長さ10～15cmの長楕円形で丁度掌にのる大きさなので

「如来は無上の智をもち、眞実を顕わし給うこと、掌中の菴羅果を見る如し」（大般涅槃経）。

その他仏典に最もよく引用されている果樹である。並木にもよく利用されている。

材の比重は0.6～0.7、木理はカシに似ており、一般建築、家具、とくに茶箱などに用いられる。日本にはマチャン、アサムなどの名で輸入されているそうである。

ところで果樹といえば、その昔中国の唐にわたり、鑑真を日本に招いた東大寺の普照が

「平安京の道路に果樹を植えれば、夏は日陰に憩うことができ、季節には果実で飢やかわきをいやすことができますよう」

と京の道路に果樹を植えるように当局に具申したそうだが、これはどうも採用されなかったようである。

5. ウドンゲノキ (梵 *Udumbala*, 優曇鉢羅樹, *Ficus glomerata*)

仏典に「稀有にして会い難きこと如来の如きウドンパーラ」という言葉がある。このウドンパーラはおそらくウドンゲノキであろうと推察されている。インドボダイジュと同じクワ科イチジク属の木で、イチジク同様花が果実の中に包まれていて、外から見えないことから、会い難いことの比喩に用いられたのであろう。

材質は軽く、インドボダイジュ同様神聖樹としてあまり利用しない。日本に南方産のイチジク属の木が輸入されているそうだから、御存知の方がおられるかもしれない。

釈迦やその弟子たちは、よくインド各地の林に滞在して宗教活動をしている。このような林を学林、樹木を学林樹木といい、前述のサラノキ、マンゴーの外、オオギヤシやマメ科のシツノキ（紫檀、黒檀などのいわゆる唐木と同属）などがある。

6. オオギヤシ (梵 *Tāla*, 多羅, *Borassus flabellifer*)

ヤシ科オオギヤシ属の常緑高木で、一名バルミラヤシともいう。シルクロード上の遺跡バルミラ地方に多かったことによる。

阿弥陀経によると極楽には七重の行樹(並木)があるそうだが、この並木は多分オオギヤシであろうと筆者は思う。というインドの霊場にはよくこの木の並木があり、玄奘三蔵の大唐西域記にも、マンゴー林と共に度々登場する。

昔はこの葉を乾かしたものを貝多羅葉と呼び紙の代用にした。法隆寺にはこの葉に書いた般若心経が保管されている。またこの葉で屋根をふき、花柄から乳液を採取して、甘味剤や酒を作り、若い果実は食用、幹は建築用材など捨てる所が無い有用材である。

樹冠部を切ると枯れるので、煩惱を絶つことを「ターラーの頭を切る如く」と表現している。

オオギヤシ以外のヤシ類、たとえばココヤシ、サトウナツメヤシ、ピンロージュ等もよく仏典に引用される。

7. デイコ (梵 *Māndāra*, 曼陀羅, *Erithrina indica*)

阿弥陀経では極楽すなわち「幸いのある所」は、生ける者の精神的、肉体的苦しみが全く無く、幸福のみ存在する所として、いろいろ描写されているが、その中に天の曼陀羅が晝夜6回雨と降ると述べ、その美しい花は菩薩の菩提心にもたとえられている。この木はおそらく、マメ科の落葉樹デイコであろうと推察される。初夏に濃紅色の花が總状花序に咲き、沖縄県の県花になっている。材質が柔らかく、狂いが少ないので、漆器生地に利用されている。

さてこの辺で、日本の木材界に縁の深い、あるいはかつて縁の深かった樹種を2、3拾ってみよう。

8. 七葉樹 (梵 *Saptapatra*, *Alstonia scholaris*)

釈迦入滅後、高弟の摩訶迦葉 (*Mahā-Kaśyapa*) の提言で、弟子たちが王舎城郊外の七葉樹の林にある岩屋(七葉樹窟)に集まって、お経と戒律の編集に着手したと伝えられている。

この七葉樹はその名の示す如く、葉が七枚の小葉からなっている。

この木については2、3の樹種が考えられるが、筆者はおそらくキョウチクトウ科の *Alstonia scholaris* であろうと思う。材の比重が軽くてシナノキに近い。日本には現地名プライの名で輸入され、箆筒などの家具、靴の踵などに使われていたので、御存知の方が多いと思う。

御承知の如く古代インドにはカーストという強い階級制度があったが、仏教はこれを否定し

「サーラ(サラノキ)、アショカ、ナーガケサーラ(セイロンテツボク)、チャンパカ(キンコウボク)

などの木の葉、花、果実には、それが枝にできた果実、幹についた果実などと、できた場所による区別がないように、人間にもその生れによる区別はない」

と述べ、また

「ウードンバーラ(ウドンゲ)やパナサ(パンノキ)の果実には、それが枝にできた果実とか幹についた果実などと、できた場所による区別がないように、人間にもその生れた上る区別はない」

と人間平等論を説いている。

9. ナーガケサーラ (梵 *Nāgakesara*, 那我計沙羅, *Mesua ferrea*)

この木については諸説があるが、筆者はオトギリソウ科のセイロンテツボク (*Mesua ferrea*) ではないかと思う。その名が示すように、材の比重0.93~1.24で、インドで最も重くて硬い木である。煉瓦色で、建物や橋などの柱、桁あるいは鉄道の枕木などに利用されている。この話では花のもつ芳香をさしている

のであろう。

10. チャンパカ (梵 *Campaka*, 瞻蔔, *Micheria Champaka*)

モクレン科やオガタマノキ属の常緑中木キンコウボクである。樹皮や葉とくに黄白色の花が強い芳香をもち、香水の原料となる。材は黄褐色で、高級家具や造作、合板用で、日本にもチャンパカの名で輸入されている。

11. パナサ (梵 *Paṇasa*, 波羅密, *Artocarpus spp.*)

クワ科パンノキ属の常緑樹パンノキ。これには数種類あるが、インドにはナガミパン (*Artocarpus integrifolius*) が多いという。

材質が強く、木理はマホガニに似て、家具、構造部材、一般木工に利用される。輸入材のテラップ、ケレダン等がこの木である。

12. エンジュ (槐, *Sophora japonica*)

仏教と共に中国から日本に伝えられたといわれ、仏教五木の1つに加えられている。マメ科の落葉中木で並木によく利用される。葉は奇数羽状複葉、うすいウグイス色の幼花を槐花と呼び、薬用や染料となる。材の比重0.74で、家具とくに工具類の柄として広い用途をもっている。